

フィールド で考える

知り合いを助ける、 見知らぬ誰かを助ける

はまだあきのり
浜田 明範 民博 機関研究員

愛を教えること

白を基調とした衣服を身につけた女性たちが賛美歌を歌いながら、町の目抜き通りを行進していく。リズムを取るために皆で叩く手拍子と少し音程のばらついた合唱が朝の静寂を破っていく。「チレ・オド」だ。

彼女たちが頭に乗せているプラスチック製の籠には、各人が思い思いに選んだ贈り物が載せられている。自分の畑で採れた農作物を運んでいる者もいれば、売り物であるパンや飲料水をもっていく者もいる。近年は、食料品だけではなく金銭を贈ることも増えてきた。

カカオ豆の生産地として有名なガーナ南部は、キリスト教の影響力がひととき強いことでも知られている。わたしは、人口一万人程度の田舎町であるプランカシで二〇〇五年より断続的に調査をおこなってきたが、そこでも住民のほとんどはキリスト教徒である。町のなかには少なくとも

一五の教会が存在しており、チレ・オドは、イースターやクリスマスといった年中行事や日曜日におこなわれる礼拝とともに教会の主要な活動のひとつになっている。

ガーナ南部でもっとも広範に話されているチュイ語で、チレ・オドは「愛を教えること」を意味する。それは、近しい親族を失った者や長いあいだ病気で苦しんでいる者に対し、同じ教会に通う信徒たちが集団でモノやカネを贈る行為である。そうすることで彼らに対する自分たちの「愛」を示すというのだ。

ガーナ南部で暮らす人びとの多くは農業や商業で生計を立てているが、これらの生計には月ごとに決まった額の収入がある訳ではない。働いた分だけが収入となる。そのため、親族の死や重病による働き手の減少は重大な経済的損失をもたらさる。チレ・オドはひとつの不幸が更なる不幸へと繋がらないようにするためにおこなわれる、互

いによく見知った者同士のみならず、おこなわれる助け合いである。

健康保険に加入すること

病気が重大な経済的損失をもたらすことは、ガーナ政府もよく知っている。政府はこの問題に対応するため、また、経済的な理由から医療サービスを利用できない人の数を減らすため、国民健康保険制度を導入している。二〇〇四年に一部の地域で試験的に運用を開始したのちに段階的に実施範囲を広げ、加入者数も着実に増加している。地域の健康保険組合によると、二〇〇七年末の時点で、プランカシの含まれる郡では全人口の六一・九パーセントが健康保険に加入していたという。

一年ごとに決められた保険料を納めて健康保険に加入すると、その年のあいだ無料で医療サービスを受け、薬剤を受け取ることができる。保険の掛け金はそれほど高くなく、個々人が計画的に

貯蓄をすれば無理なく支払える金額となっている。この背景には、二・五パーセントの消費税が目的税として設定され、その税金が各地の健康保険組合に投入されていることがある。これは健康保険に加入している者だけが税金の優遇を受けていることを意味しており、人びとも健康保険に加入することは得たと考えている。

健康保険が本格的に普及しはじめた二〇〇六年からの五年間で、町の診療所を訪れる患者の数は三倍以上になっており、人びとはこれまでよりも頻りに医療サービスを受けることが可能になっている。診療所や病院の人手不足や掛け金の妥当性、公平性の有無といった問題も山積しているものの、

健康保険が本格的に普及しはじめた二〇〇六年

からの五年間で、町の診療所を訪れる患者の数は三倍以上になっており、人びとはこれまでよりも頻りに医療サービスを受けることが可能になっている。

診療所や病院の人手不足や掛け金の妥当性、公平性の有無といった問題も山積しているものの、



教会の前からチレ・オドの行進を始める女たち



チレ・オドでは、食料品が贈られることが多い



健康保険はさまざまな書類によって成り立っている



患者の増加に伴い検査設備も充実した

地で見ることがができる。一方で、わたしたちに馴染み深い健康保険は、アフリカではほとんど普及していない珍しい制度である。これらのふたつの助け合いは、どちらも病気によって引き起こされる経済的損失を補うものであり、集団から個人へとモノやカネを移動させるやり方である。

今日、ガーナで暮らす人びとはチレ・オドと健康保険をともに用いながら互いに助け合い、病気と苦境に対処している。「知り合いを助ける方法」と「見知らぬ誰かを助ける方法」の両方を駆使しながら生きているということが、わたしたちと同じ時代をガーナ南部で暮らす人びとの特徴なのかもしれない。